

篠栗四国八十八カ所霊場

— 地方霊場の発展をめぐる一考察 — (上)

豊島 和子

The Eighty-eight Sacred places of Sasaguri-Shikoku (I)

— Evolution of local sacred places —

Kazuko Toyoshima

関西外国語大学研究論集 第62号 抜刷

Journal of Inquiry and Research

No. 62

July 1995

Kansai Gaidai University

Osaka, Japan

篠栗四国八十八カ所霊場

—地方霊場の発展をめぐる一考察— (上)

豊島和子

はじめに

わが国では四国八十八カ所札所を写した「新四国」霊場が数多く見られる。なかでも福岡県柏屋郡篠栗(ささぐり)町内に設けられた篠栗四国八十八カ所札所(以下、篠栗霊場と記す)は小豆島、知多半島とともに巡拝者の多い三大「新四国」霊場の一つとして、現在、よく知られている。福岡市から東へおよそ12キロに位置し、JR篠栗線と国道201号線および八木山バイパスの開通する篠栗町は、近年、福岡市のベッドタウン化が進んでいる。町域の大部分が山地であるため、春の桜、秋の紅葉などに代表される風光明媚な土地柄でもある。こうした地理的位置にあるこの篠栗霊場は、伝承によると、天保6(1835)年、相良郡姪ノ浜(現・福岡市西区)安徳寺の慈忍尼が発願し、その志を継いだ地元の藤木藤助とその有志の20年におよぶ努力の結果、完成されたという。明治37年、草場千代吉の「篠栗四国導和讃」に、「ここに開ける霊場は道のり拾里巷丁余」と詠まれた遍路道は3月6日の霊場開きが済み、毎年、彼岸前後になると多くの巡拝者で賑わう。筑後地方では「篠栗参りをしないと夏病みをする」との言い伝えがあり、¹⁾ 現在、この地を訪れる人びとは年間百万人とも言われている。

本論の目的は、こうした地理的状况を有し、「本四国」とも呼ばれる四国八十八カ所札所のミニチュア化した篠栗霊場が、なぜ今日も多くの巡拝者を引きつけているのか、その歴史的・宗教的要因をさぐり、「本四国」とは異なった地方霊場の存在とその意義を明らかにし、近世末期以降の地方民衆の宗教観を理解する一助にすることである。

本稿作成にあたって、1993年5月に篠栗町の伝承者・故西 義助氏(明治38年生)にお会いし、多くのご教示を受けたことを付け加えておきたい。²⁾

以下、篠栗霊場の研究史を整理し、順に述べていきたいと思う。

(1) 篠栗霊場の研究史

今日の篠栗霊場の盛況とは裏腹に、これまでこの霊場について書かれた文献・資料は意外に少ない。

まず文献としては

- ①西 義助『ささぐり くらしの四季』(手書きコピー印刷 昭和57年 pp.62-82)
- ②篠栗町文化財専門委員会編『篠栗町誌 歴史編』(篠栗町 昭和57年 pp.243-248)
- ③星野英紀「新四国霊場の展開過程—福岡県篠栗霊場のばあい—」(『竹中信常博士頌寿記念論文集 宗教文化の諸相』山喜房佛書林 昭和59年 pp.619-635)
- ④同「民衆の宗教エネルギーの磁場“篠栗八十八カ所霊場”」(谷亀利一編『九州篠栗霊場の旅—弘法大師の世界—』読売新聞社 昭和61年 pp.16-19)

が挙げられよう。①は明治期の「札所配置一覧表」を記し、篠栗霊場の特徴の一つである頻繁な札所の移動変遷を知るうえで参考になる。②は霊場沿革の資料として、1番札所・南蔵院の2代目住職林 覚雅師が初代林 覚運師の業績や篠栗霊場の伝承その他をまとめた著書などを引用している。③④は管見によれば、篠栗霊場に関する数少ない研究論文である。いずれも霊場創立期の歴史的展開や明治期の信者獲得の状況がうかがえる。しかし星野氏も指摘されているように、明治期の霊場形成における空白期間の解明にはおよんでいない。また両論文とも執筆後、すでに10年前後が経過しており、その間、霊場周辺もかなり変化していることは否めない。

一方、一般の人びとを対象とした霊場の案内記としては

- ①中村紫葉『新四国八十八ヶ所巡拝』(中野景雄発行 昭和10年)
- ②平幡良雄『篠栗八十八カ所 筑前の霊場めぐり』(満願寺教化部 昭和59年)
- ③谷亀利一編『九州篠栗霊場の旅—弘法大師の世界—』
- ④井上 優『篠栗八十八カ所霊場めぐり』(西日本新聞社 平成5年)

などが発行され、特に①には戦前の貴重な霊場写真が数多く掲載されており、大変有益である。

また案内記以前の巡拝図が若干残されており、その一つは、①「新四国八十八箇所巡拝略圖」で、同霊場の奥の院がある若杉山の石井坊(石泉寺)に保存されていた「嘉永5年春三月」の奥書きをもつ作成図である。³⁾この略図の右下には「多ノ浦 藤助」すなわち藤木藤助ほか7名の世話人が挙げられている。次に前掲『篠栗町誌 歴史編』には、明治22年作成の②「福岡縣糟屋郡篠栗金出高田中萩尾八十八ヶ所順拝畧圖」が載っている。①②には札所の番号が記されておらず、また札所によっては複数の本尊である仏像の合祀が認められる。その他、『ささぐり くらしの四季』には、③西 義助氏作成の大正時代の札所配置図が収められており、参考になる。

(2)地方霊場とは

わが国の巡礼霊場としてもっともよく知られているのは、平安時代に、花山法皇が巡礼を発願したという伝承をもつ三十三所観音霊場(室町期以降に西国三十三所観音霊場が成立)と、弘法大師空海の足跡を巡る四国八十八カ所霊場である。四国霊場については、その札所が88カ所と定められ、これらを巡る形態が整うのは室町時代と考えられており、四国遍路の初期形態

を示す修行僧の存在は、すでに平安後期にまでさかのぼることができよう。⁴⁾ 四国路はその地形が山と海に囲まれ、全長360里(約1,414km)という長い行程を有し、他の巡礼に比べるとその「苦行性」は極めて大きいと考えられている。しかし近世に入ると民衆の経済力の向上などを背景に、西国三十三カ所観音霊場と四国八十八カ所霊場を廻る巡礼および遍路は活潑化してくる。それと同時に、今は「地方霊場」と呼ばれる西国・四国霊場を模倣した小霊場が全国的な規模で広まり、各地に形成されていった。これから取りあげようとする篠栗霊場もこのような「小四国」の一つである。

小型の西国霊場や四国霊場は「新西国」「新四国」、「小西国」「小四国」、「准西国」「准四国」とも呼ばれる。また小豆島(香川県)や佐渡ヶ島(新潟県)、愛媛県大島、淡路島(兵庫県)、五島(長崎県)、壱岐(長崎県)のような島にある場合は「島西国」「島四国」とも呼ばれる。さらに一つの寺院の裏山や境内に、88の祀堂を置いた京都御室仁和寺裏にある成就山八十八カ所札所(御室新四国)のような場合は、「ミニ四国」と呼ばれることもある。そして「新西国」と「新四国」をあわせて「写(移)し霊場」と呼ぶ場合もある。「新西国」の場合は「〇〇観音霊場」と呼ばれる札所が全て西国三十三カ所の写しであるかどうかは明らかでなく、また西国三十三カ所を写したと言われる坂東札所や秩父三十四カ所札所をさらに写した「孫霊場」もあるので、その名称と形態などはかなり複雑であるが、「新四国」の場合には全て四国八十八カ所の「写し霊場」であることが確かである。新城常三氏によると、江戸中期から昭和初期までの間に創設された「新四国」霊場のなかでは、貞享3(1686)年成立の小豆島新四国と、正徳年間(1711-1716)に創設された甲斐四国が最も古く、筑前島郷のように近世初期あるいは中期の成立を推定される霊場もあるが、享保(1716)以前に成立の確実な札所は上記2カ所のみであると言う。

ところで「新四国」霊場の多くは、例えば、文化4(1807)年創設の大島新四国、文化10(1810)年の知多新四国、文政10(1827)年の御室新四国などは、文化・文政(1804-1830)年間か、あるいは天保期以後の創設であるが、⁵⁾ これは経済力をつけてきた幕末上層農民が、身近に自分たちの霊場をもちたいという願いから出発した一種の民衆運動であるとも考えられる。それは設立を発願した「開祖」に目を向けると理解できよう。例えば、知多新四国では妙楽寺の亮山阿闍梨、後述する篠栗新四国では、発願者は慈忍尼という在地の僧尼であるが、前者は知多の福住の半蔵であり、後者は篠栗の藤木藤助のような上層農民の協力を得て霊場を完成させたのである。また若干時代はさかのぼるが、安永4(1775)年頃、相馬新四国を開設した観覚光音大禅師(伊勢屋源六)のように、仏門に入った元商人が「開祖」であった例がある。⁶⁾ もっともなかには領民を他領に出さないために、封建領主自らが設けたと伝えられる「新西国」の例もあり、⁷⁾ 必ずしも強調はしえないが、幕末頃には、上層農民と地方霊場のつながりを見出すことができる。

次に写し霊場の規模については、大きいものは数カ国におよび、⁸⁾ 旅程の長さにおいて、「本西国」や「本四国」にひけをとらない霊場から、数カ町村にわたる霊場、1町村の中に限定される霊場など、その規模は多様である。今その行程に注目すると、「本四国」が約1,414kmに対し、佐渡新四国は300km、知多新四国は165km、小豆島新四国は130km、篠栗新四国は43km、御室新四国は徒歩2-3時間で廻ることができるという具合である。ちなみに1国内に設定された霊場は「国西国」とか「国四国」と呼ばれ、1郡内では「郡中札所」と呼ばれることもある。そして新霊場開創に際して、特に「新四国」の場合は「本四国」の各札所を巡り、その土砂を持ち帰って新しい札所を設ける場合が少なくない。⁹⁾

ところで「新西国」「新四国」霊場が全国にどのくらいの数があるかに留意すると、塚田芳雄氏の『日本全国三十三所八十八所集覧』（昭和56年発行分の補遺編）には、平成2年7月1日で533の「新西国」札所と、平成4年10月末日で357の「新四国」札所が表に整理されている。この表はもとより未確認、不詳分もあると考えられるため概数ではあるが、それにしても膨大な数である。これには寺院の裏山にある「ミニ西国」「ミニ四国」は含んでおらず、実数がどれ程あるかについては不明である。しかし、これらの「写し霊場」の多くは、扁額や標石、巡拝図などが残っているだけで、霊場そのものは全く忘れ去られているものもあり、大阪府富田林市の石川八十八カ所のように『村誌』に残るだけのものもある。¹⁰⁾ また淡路八十八カ所のように、七福神巡りの信仰習俗に押されて衰微しつつある「国霊場」もあり、戦後、観光ブームとマッチして霊場会が作られ、新しく札所を復活した霊場もある。「新四国」に限ってみても、多くの上記にふれた数多い霊場のうち、現在、巡拝者を迎えている霊場がどれ程あるかを考えるならば、その数は激減すると思われ、巡拝ガイドの出版物を購入することができ、町村役場などで常に巡拝案内図を配布しているのはさらに少ないだろう。¹¹⁾

このように霊場の盛衰はさまざまであるが、そのなかでも小豆島、知多半島にある「新四国」とともに篠栗霊場は、現在、最も活気に溢れる「新四国」霊場の一つと言うべきであろう。

(3) 篠栗霊場の形成

(イ) 開創期

山地の多い篠栗町の中で、町の南に位置するのは海拔684mの若杉山（旧・糟屋郡若杉村）である。『篠栗町誌 歴史編』によれば、若杉山は背後の砥石（といし）山や三郡（さんぐん）山地よりさらに南の「宝満山を主座とした山伏の修験場」¹²⁾ の一つであったことが知られ、文化9（1812）年に若杉山へ峰入りをした記録などが残っている。¹³⁾ この若杉山頂には県社であった太祖（たいそ）神社が建立されており、その境内には、篠栗霊場の奥の院といわれる大師堂が控えている。大師堂や堂内に奉安された弘法大師像の起源は不詳であるが、¹⁴⁾ 奥の院は同霊場最大の難所にもかかわらず、多くの信者（現地では遍路とも言われている）が参っている。この若杉山と弘法大師とのつながりは、「元禄壬申之歳」すなわち元禄5（1692年）に、貝原

好古が著した『筑前糟屋郡分杉山大祖神社縁起』¹⁵⁾に多少記されている。「古き文どもを考え且古老の口実を傳聞」いた好古は、次のように述べている。弘法大師空海は帰朝の折、

此山に登りて秘法を修せられしとかや。今に独鈷水とて其址有り。又、弘法しはらくとゞまり居られし寺坊の址として、高野莖と伝所有

と記して、若杉山が弘法大師修行の場であると伝えられている。現在、奥の院にある独鈷水は万病にきく大師ゆかりの霊水として知られているが、好古によれば、大師以前にはインド僧・善無畏三蔵(637-735)が若杉山へ来山した伝承もある。

このような弘法大師足跡の言い伝えは、大師修行の地とされる若杉山をいただく篠栗を新霊場開創にふさわしい場とし、霊場発足後はその正当性あるいは権威付けに寄与したことであろう。

では篠栗霊場はどのように形成されたのであろうか。第一に、霊場再建に尽力した藤木藤助の明治28年に建立された記念碑銘文¹⁶⁾に注目すると、次のような概略が記されている。すなわち、天保6年、尼慈忍は弘法大師の霊跡を尋ねるため篠栗にやって来た。慈忍は戒律を保つとともに、人びとを勸化して信望を得る。やがて慈忍は「衆生済度ノ冥福ヲ禱ラン」がため、四国八十八ヶ所霊場を篠栗に勧請することを発願し、仏像20体を造立した。しかしその理由は不明ながら失踪してしまう。そこで嘉永3(1850)年、地元田ノ浦の篤信家藤木藤助が慈忍の志を継ぐことを決意し、艱難の末、有志者とともに安政2(1855)年、88体の仏像を安置したのである。そして同年、藤助は満願成就の御礼に有志者と四国遍路に行き、四国の各札所にある土砂を勧請して、篠栗新霊場の仏像内に安置した。以後、これらの仏像の霊験著しく、篠栗新霊場は盛況に向かうことになったという。

以上が篠栗霊場の起源伝承であるが、前掲『新四国八十八ヶ所巡拝』には、藤木藤助は若杉山の石井坊の住職に師事して得忍と号し、真言密教の大意を悟るほど信仰に深く帰依していたという。ちなみに上記銘文は内川愛道が作成したのであるが、西氏によると、愛道は地元金出(かないで)炭鉱で治安を守る請願巡査をした後、役場の書記に転じた人と言われる。明治28年の「札所配置一覧表」に目を向けると、慈忍から藤助に造立継承された88体の仏像の中には、19世紀初頭の享和仏が4体含まれていることがわかる。西氏は天保期以前に祀られていた古堂を札所に充当したため、これら4体は以前から古堂に安置されていた仏像であると指摘されている。そうするとその内訳は、天保年間に慈忍が造立した天保仏は20体、嘉永年間、藤木藤助たちが造立した嘉永仏は17体、安政年間、同じく藤助たちが造立した安政仏は47体の計88体になるのである。

さて篠栗霊場は藤助の銘文による安政2年の完成以後、明治維新を迎えるまでのわずか10年余の間に、少なからぬ巡拝者を迎えるようになったらしい。その要因の一つに、文久元(1861)年、桐生利平などの世話人が中心となって福岡藩に道路修繕費を献金したことが挙げられる。

明治27年の記録¹⁷⁾では「文久元年三月、旧福岡藩庁ノ許可ヲ得テ、同年八月ニ至リ桐生利平外数名有志者ヨリ、道路修繕費トシテ幾何ノ金ヲ上納シ」云々と伝えられており、これにより篠栗霊場の名が高まったのである。

一方、篠栗霊場の形成は若杉山の仏教寺院にも衝撃を与え、¹⁸⁾「大師礼讃、仏蹟再興の与論膿化し、明治初年、古堂（ふるどう）勝泉院跡に大円院として大師堂」が建立された。これは恐らく若杉新四国開創計画の一環であり、そのため石仏が各所に配置されたという。さらには宿舎や運動場の加設なども行われたが、一小村落の民衆誘致事業としては大成しなかった。また同じ目的で「空海庵」、すなわち大師の住坊であったとされる金剛頂院の復興を進めるため、まず明治初年に南蔵院の小舎が建立されたものの、落成式を迎えたのはその後70年余りあとの昭和15年であった。金剛頂院では本尊仏などのほか、堂内には八十八仏体が奉納されたが、昭和30年に祝融の災いを蒙り、仏像など多くは焼失している。¹⁹⁾ また各所に配置されたという前述の石仏も、金剛頂院の周囲に集められるなどしてその数が減少し、十三仏として現存するのみである。²⁰⁾

(四) 廃仏毀釈と南蔵院をめぐる問題

維新後の新時代を篠栗霊場はどのように迎えたのか、次に明治期の状況に目を向けたい。通説では、明治初年の神仏判然令による廃仏毀釈運動は篠栗霊場にも大きな影響をおよぼしたという。それは明治19年、県令による篠栗新四国廃棄令という形になって現れたのである。そこで大部分の札所が小さな堂宇の集まりにすぎなかった霊場に、同32年、高野山から南蔵院を迎え、各札所をその飛び地境内とする寺院形態を取ることで、霊場廃棄の危機を回避したという。霊場第1番札所・南蔵院の2代目住職林 覚雅師は、その間の状況を次のように語っている。

ところが不幸にして明治初年の太政官布告によって、廃仏毀釈令が発令され、それが尾を引いて明治19年には県令によって、篠栗霊場廃棄が命ぜられました。

これに対して敢然として立ち向かわれたのが、時の村長藤喜一郎氏で、村の有志の方々と共に、陳情や交渉、あらゆる方法で約十年間、血のにじむ努力を続けられました。その精進が報われて、内務省令によって寺院形態を取る事によって残置が許可されました。

そこで和歌山県高野山にありました南蔵院を、総本山として迎え入れ、八十八カ所の堂宇境内を南蔵院の飛び地境内として正式に認可を受けたのであります。時に明治32年（1899年）三月でありました。²¹⁾

ところで廃仏毀釈の影響で霊場廃棄令が発せられ、その結果、南蔵院が迎えられたという説明に、星野英紀氏は疑問を呈されている。それは県令が廃棄令を出した明治19年には、すでに廃仏毀釈は全国的に沈静化されていたためである。廃棄令の理由を「それまでの正規僧のいない期間中に、篠栗霊場をめぐる諸状況のなかでなんらか問題になる点があったのではなかろうか」²²⁾と指摘されている。実際、他県へ目を向けると、佐賀新四国八十八カ所や大分県の三重

郷西国、井田郷西国霊場は明治17、18年頃に開創されたと言われており、²³⁾それはとりもなおさず、その頃には廃仏毀釈の嵐は完全に沈静化していたことを示すものである。従って、明治19年の篠栗新四国廃止令は別個の事情によるもので、通説として「廃仏毀釈が尾を引いて南蔵院が迎えられた」という説明は歴史的事実ではなく、むしろ篠栗霊場の伝承として理解すべきであろう。²⁴⁾

ところで篠栗町の桐生家には明治27年、福岡県知事宛ての「明細帳編入願＝付理由書」の控えが残されている。これは明治12年、全国的に通達された仏寺堂塔明細記入令に端を発する明細帳記入の始末および嘆願の書である。これによると、桐生家が土地を所有している34番、45番、66番札所の各本尊仏が明細帳に記入漏れとなっていたので、明治25年の県の通達により、同年提出したところ、内容不完全で却下されたらしい。そこでこの理由書を再度提出したのである。理由書には篠栗霊場全札所の取調書56通が添付されている。しかしこの理由書はまた不首尾に終わり、再々度「堂宇明細帳編入願副申書」が明治30年に提出されている。²⁵⁾ 前述の理由書や篠栗での聞き書きなどを考慮すると、福岡県の明細帳記入の通達を霊場側は放置していた模様で、明治25年の県の最後通達で霊場側はあわてたらしい。南蔵院を霊場の総本山として迎え、霊場の体裁を整えることで、ようやく明治32年に明細帳編入の許可がおりたのである。ただ明治12年に始まる明細帳記入の問題と19年の霊場廃棄令との間に、どの程度の関係があるのかはさらに詳しい調査を要する。

南蔵院については、昭和5年発行の『福岡縣寺院沿革史』²⁶⁾にも若干掲載されているので紹介しよう。南蔵院というのは

寺院保存の古記録一切なくして確なる年代等不明にして知るに苦しむ六百年前、釋行空(世人呼んで一宿上人)筑後の國黒木蔵大夫の懇願により南紀高野山の講坊を初め十二坊を建立せる内の一寺院なり。明治32年新四國靈場の盛なるに順ひ村長及信徒總代等の懇望に依り官許を経て當地に移轉せり、後本堂庫裡の落成を見寺院としての資格完備するに際し新四国八十八ヶ所の佛堂残らず飛地境内の佛堂として明細帳編入の官許をうけ南蔵院之が本部とし第一番札所として以下八十七ヶ寺院即ちこれなり。

と述べている。

篠栗霊場は南蔵院を迎えたことで飛躍的な発展を遂げることになるが、布教に尽力したと言われる南蔵院の初代住職林 覚運師についても、同書は、次のようなプロフィールを記している。すなわち覚運師は明治8年10月28日生まれで、篠栗へやって来たのはまだ24歳の頃であった。師は和歌山県高野町の出身で、12歳のとき高野山本覚院の住職稲葉堯運師に師事して仏学を始めたが、身体虚弱のため一時下山する。その間、山県玄浄師について漢学を修め、健康を回復したので明治30年、再び帰山する。そしてその2年後、寺号移転と同時に南蔵院の住職として篠栗へ来ている。同書は「師は本山の布教師として中國以南九州全體にわたり布教を兼ね

て新四國を世に紹介」した功労者である、と結んでいる。

確かに篠栗霊場は、現在でも筑豊地方など炭鉱で知られた地域からの巡拝者が多い。筆者の聞き書によると、それは南蔵院の林 覚運師や62番札所の遍照院・西 義寛師たちが各地の炭鉱を廻って大師信仰を広め、講を結成させ、鉱夫たちが篠栗にやってくると、寺に宿泊させて歓待するという布教努力の結果であった。覚運師は信者獲得のため、自身、炭鉱で鉱夫たちと一緒に働きながら布教したという。鉱夫たちは落盤、トロッコ事故など常に危険にさらされているため、生命の危機を強く感じており、信仰心は深かったと言われる。南蔵院では住職の代が変わっても、戦後、昭和35年頃まで炭鉱への布教は続いていた。布教の一つの方法として、覚運師による「いろは教訓数へ歌」が伝えられている。これは例えば、「いの字とや いつもかわらぬにこにこと機嫌よくして働けよ働けよ」「ろの字とや ろくろく知らぬ事知らを知らふりして恥かくな恥かくな」「はの字とや はらたち胸のもゆる時佛のお慈悲を思い出せ思い出せ」などと続き、「いろは教訓数へ歌」は日常生活に即した解り易い文言となっているのが特徴の一つである。

また漁民の人びとを布教の対象とすることにも腐心し、覚運師たちは壱岐、対馬などの島嶼部の布教にも力を注ぎ、壱岐には南蔵院の別院が設けられた。現在でも南蔵院はじめ多くの札所には九州島嶼部の漁民の献燈が多く、奥の院ではスクリーが幾つか奉納されている。漁師もまた炭鉱夫と同様、「板子一枚 下は地獄」と言われるように、常に危険と隣合わせに暮らしていただけに、神仏に頼る気持ちは強かったのである。

このように明治期から霊場側は労働者一般を中心に大師信仰を布教したが、とりわけ筑豊炭田の発展は霊場を支える大きな要因の一つになった。一方、霊場側も巡拝者のために遍路道を整備したり、橋を架設するなどの受け入れ態勢を次第に整えていったのである。

(4) 札所の発展と変遷

明治32年の南蔵院招聘と、明治37年の篠栗線の鉄道開通以来、篠栗霊場の発展は目を見張るばかりであった。明治24年に篠栗村の人口は2,448人であったが、²⁷⁾『篠栗町誌 歴史編』では明治41年の篠栗霊場の年間宿泊者数を67,500人と報告している。また大正10年に61番札所・山王および40番札所・一ノ滝の報告では年間52,000—55,000人の参詣者を数えている。²⁸⁾近年の巡拝者数については、星野氏が昭和55年の団体参拝客の概数を記録で計算しておられるが、巡礼地の参詣者を正確に推定するのは至難に近い。しかし最大の参詣者があると考えられる1番札所・南蔵院では、年間60—80万人と称している。²⁹⁾他の多くの写し霊場の札所が、戦後軒並みに衰微していることを考えると、この発展は驚異と言うほかはない。

次に札所自体の発展を考えてみよう。篠栗霊場の札所は、①住職の在住する寺院形態を取るものと、②守堂者しかいない祠堂形態を取るものに大きく分けられる。そして寺院形態を取るものはその発展過程から見て、さらに2つに分類できる。まず一つは、霊場創設時、既に寺

院として存在した浄土宗の寺に薬師如来が安置されて札所となった35番・珠林寺薬師堂のような寺院や、かつては「番外札所」であったが、後に札所の権利を入手して札所寺院となった83番・千手院のような「寺院先行札所」とでも言うべきものと、二つには、在家の守堂者の後継者や他の親族が出家して札所の祠堂を寺院本堂とし、自ら住職となった75番・善通寺や79番・補陀落寺のような「札所発展寺院」とでも言うべき形に大別できる。南蔵院はすでに述べたように、祠堂に高野山から寺の名義と住職を招聘したものであるが、「寺院先行札所」に準ずるものと考えらるべきであろう。

札所が決定した安政期には、恐らく全ての札所が祠堂形式をとっていたものと思われる。しかし現在では21札所が寺院形式を取り、残りが祠堂形式である。この変化はどのようにして行われたか、それは「寺院先行札所」を除いて、一般的な篠栗の札所は次のような発展形態を取ったと思われる。

(1)まず創設当時、ほとんど全ての祠堂の守堂者は一般農家の人たちで、信仰心から札所を引き受け、祠堂の世話をしていた。

(2)しかし遍路が増え、求めに応じて宿を貸しているうちに遍路宿として宿屋を経営をするようになったり、あるいは食堂として遍路に飲食を供するようになった。

(3)(1)または(2)のような守堂者の親族が仏門に入り、修行を積んで僧侶となり、祠堂を大きくして寺院を作っていた。

現在、(2)の形の守堂者が旅館(遍路宿)や食堂の主人である札所は多い。3番・米屋旅館、9番・山王屋旅館、13番・入喜屋食堂、17番・若松屋旅館、26番・近松茶屋、29番・遠海屋旅館、30番・高嶋屋旅館、31番・紙屋旅館、38番・丸見屋旅館、41番・松栄屋旅館、54番・嶋屋旅館、57番・栄福屋旅館、63番・若杉屋旅館、64番・荒田屋旅館、65番・立花屋旅館、71番・豊栄館、80番・緑屋旅館、などである。また(2)から(3)に発展したものとしては43番・大日屋旅館→明石寺、44番・亀の屋旅館→大宝寺、75番・善通寺茶屋→善通寺、79番・恵比寿屋旅館→補陀落寺などがある。もちろん全ての札所がこのように直線的に発達したわけではなく、古くからそのまま小さい祠堂を農家で守っている札所も多くある。

次に、創設から現在に至るまでの札所の場所的な変遷を見てみよう。この場合、たとえ「本四国」であっても札所は常に不動であったわけではない。第6番・安楽寺、第7番・十楽寺など15札所は過去に移転しており、第34番・種間寺、第62番・宝寿寺のように2度移転した札所や第53番・円明寺のように6度移転した札所もある。³⁰⁾しかし「本四国」と比較するとはるかに浅く、まだ百数十年の歴史しか持たない狭い篠栗霊場の中で、札所の位置が目まぐるしく変化しているのは興味深い。『ささぐり ぐらしの四季』によれば、創設以来、当時までに場所的に全く移動のなかった札所は47札所、種々な理由で移動した札所は41札所であり、後者はほぼ46%に達する。しかも8番・下町観音堂(中河内→下町→下町)、12番・千鶴寺(大久保→

萩尾→郷ノ原)、18番・篠栗恩山寺(山手→上町→上原)、28番・篠栗公園大日寺(城戸→中町→公園)、36番・(呑山)天王院(田ノ浦→山手→呑山)、79番・補陀落寺(城戸→中町→下町)、83番・千手院(城戸→松ヶ瀬→御田原)と3回も動いている札所が7カ所もある。³¹⁾

また祠堂あるいは土地の所有者も盛んに変化している。札所の権利が相続されたり、縁故により外部の人の手で祠堂が引き継がれるのは当然であるが、時には売却され、譲与され、また76番・萩尾薬師堂の場合、守堂者の娘さんが持参金として札所の権利を持って嫁入りした例もある。正確に移動の状況を知ることは不可能であろうが、おおよその状況を見るため、明治28年の祠堂の土地所有者と現在の守堂者が同姓の札所を探してみると、4番・藤家、5番・印家、6番・松尾家、19番・安倍家、20番・荒巻家、23番・有隅家、30番・平井家、31番・桐生家、35番・珠林寺、38番・有隅家、43番・荒巻家、47番・萩尾家、48番・村瀬家、52番・藤家、58番・桐生家、65番・三船家、70番・古屋家、73番・有隅家、78番・平井家、80番・平井家、81番・井上家、82番・荒巻家、88番・桐生家の23札所(26%)しかない。

札所本尊仏については、(3)篠栗霊場の形成の項で既に述べたように、篠栗霊場の開創は慈忍尼と藤木藤助を中心とする有志による「本四国」と同じ本尊仏を彫って、祠堂に安置することから始まった。しかし明治32年の南蔵院招聘以後、霊場の発展は著しく、福岡を中心とした九州各地に信者を多くもち、札所の堂舎が改築される度に仏像を寄進したいという要望が相次いだのである。西 義助氏の記憶によれば、「仏像は荷車に乗せられ、博多から行列を組んで運び入れられた。当時は札所のなかでは住職のいたのは南蔵院と遍照院だけだったので、開眼供養には博多から僧侶が応援にやって来たものだった。」という。³²⁾

このように本尊仏が寄進された結果、現在どの札所でも堂内中央に安置されているのは後に作られた大きく立派な仏像であり、霊場開創当時の小さな石仏は隅にひっそりと祀られているのが実情である。筆者が守堂者に尋ねても、「さあ、最初の仏さんはどこにいらっしゃるのでしょうか」とその存在さえも定かでない場合もあった。また最も不変であるはずの本尊仏の種類までが変わっている札所もある。例えば、4番・金出大日堂の地藏菩薩→大日如来、30番・田ノ浦斐玉堂の文珠菩薩→阿弥陀如来、41番・平原観音堂の地藏菩薩→十一面観世音のように3カ所ある。堂舎の改築、増築は今もなお盛んに続けられている。

(5) 篠栗霊場の巡拝順序

西国巡礼の場合でも四国遍路の場合でも、巡礼霊場は原則として札所の番号順に巡拝するのが普通である。それは「小西国」の場合も「小四国」の場合でも例外ではない。ただ四国遍路の場合でも、1番・霊山寺から番号順に廻る「順打ち」と、霊山寺から3番・金泉寺までを「順打ち」した後、88番・大窪寺から番号の逆に廻って行く「逆打ち」とがある。いずれにしても番号の順に、あるいは逆に廻るためにも札所の番号が基礎になっている。しかし「小西国」や「小四国」には、現実的に番号順に廻るのがやや困難な札所もある。それは名古屋を中心に全

行程70里に及ぶ本州三十三観音、奥州陸奥糠部郡三十三観音、備中西国三十三所などである。もっとも、これらは部分的に番号順に廻れない札所があるというだけで、絶対的に不規則ではない。³³⁾これに比して、篠栗霊場は札所の番号は完全に不規則であり、巡拝順路と札所の番号が一致する所は全くないと言っても過言ではない。これ程不規則な札所は、篠栗以外には明和8(1771)年に成立した下谷浅草三十三所と、寛政8(1796)年以前に成立した田名部海辺三十三番のみである。³⁴⁾

篠栗霊場の場合、番号順に廻れないという問題は、やむを得ない原因の結果として生じたものであろう。というのも、88本尊仏創設の際は、「本四国」の四カ国に準じて篠栗村・高田村・金出村・萩尾村の4カ村に安置することを計画したが、なかなか札所の番号についており合いがつかなかったと言われる。その原因は(ア)創立発起(天保期)から完成(安政期)まで20年の歳月がかかり、仏像が完成するに従って順序不同で番号がきめられたこと、(イ)願主がそれぞれ自分の好みの本尊、好みの札所番号をもっていたこと、(ウ)最初は願主不足で、同一祠堂内に2、3体も7、8体も祀った所さえあったことなどである。³⁵⁾筆者はさらにそれに加えて、他の霊場に比べて、札所の譲渡、売買、相続などのために、各所の位置が変わることが多かったことをもう一つの原因として挙げておきたいと思う。

それでは、そのような配置が不規則な札所をどのように廻るのかと言えば、番号にかかわらずなく、いずれかの基点を定め、至近の札所を順に廻って行く方法をとっている。最初は何のように廻ったかという点は不明であるが、明治37年6月吉塚・篠栗間に国鉄篠栗線が開通してからは、普通、駅の裏(北方)の33番・本明院を「打ち初め」にし、番号を無視して、一つの札所から最も近くの札所へと場所を追って、ほぼ3日かかって廻り、駅の表(南方)の79番・補陀落寺で「打ち納め」にする巡拝路が確立された。その後、昭和43年5月、篠栗線が桂川駅まで延長され、筑豊本線と接続するようになってからは、篠栗線の城戸駅で降り、1番・南蔵院から「打ち始め」て、同じように3日かかってまた城戸へ戻り、31番・城戸文珠堂で「打ち納め」にする巡拝路もできた。最近の自動車やマイクロバスでの巡拝も、このどちらかの巡拝路によるのが普通である。前述の霊場案内記の中で、井上 優氏(西日本新聞社)は33番・本明院からの順路、平幡良雄氏(満願寺教化部)と谷亀利一氏(読売新聞社)は1番・南蔵院からの順路をとっている。³⁶⁾ただいずれの場合にも、法会の際、僧侶が読経しながら仏堂や仏像の周囲を右回りに巡る右繞のように、各札所を右回りで巡拝する点では、「本四国」および小豆島、知多半島の「小四国」と同様である。

以上、篠栗霊場の形成と展開を見てきたのであるが、次号ではさらに(6)篠栗霊場の特徴(7)篠栗霊場の現状(8)結論を述べたいと思う。



(1) 篠栗の伝承者・故 西 義助氏



(2) 「打ち始め」の第33番札所 本明院



(3) 第17番 山手薬師堂



(4) 「打ち納め」の第79番札所 補陀落寺



(5) 補陀落寺に奉納された金剛杖



(6) 漁師の信仰を物語る奉献物 (奥の院)

(註)

- 1) 朝日新聞福岡総局編『続・博多いまむかし』朝日事業開発 昭和48年 p.116
- 2) 西 義助氏は明治38年篠栗町篠栗に生まれ、郵便局に勤めながら、独学で小学校教員の資格をとり、昭和8年から43年まで小学校教諭として教鞭をとられた。伝承に対する深い関心と優れた記憶力によって、克明な民俗誌を書き残されたが、『くらしのことば』(平成3年)『子どもの四季』(平成4年)のみが福岡の不知火書房から出版されている。平成5年歿。
- 3) 「民衆的宗教エネルギーの磁場“篠栗八十八カ所霊場”」 p.17
- 4) 四国遍路の初期形態については、史料的にはよくわからない。しかし五来重氏は『梁鹿秘抄』(巻第2)に見える今様歌や、『今昔物語』(巻31第14話)の説話を踏まえて、四国辺地修行者の存在を指摘されている。(『遊行と巡礼』角川書店 平成元年 pp.106-107) ここでは一応、それを四国遍路の初期形態としておきたい。
- 5) 新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房 昭和63年 p.1129; 御室新四国については『日本全国三十三所八十八所集覧』 p.45を参照。
- 6) 知多については、中尾 堯編『古寺巡礼辞典』 p.229; 相馬については、石井房子・石丸裕子『新四国相馬霊場八十八ヶ所-コミュニティとしてのひろばの役割』昭和49年度 日本女子大学卒業論文 pp.12-15を参照。
- 7) 時代的にかなり古いので伝説的ではあるが、例えば、会津三十三観音巡りは寛永20(1643)年、藩祖保科正之が領主となって来封したとき、他国への参詣旅行を防ぐため高僧と計って三十三カ所札所を定めたと伝えられ、また遠江三十三観音巡りは江戸初期に掛川藩主のお声掛かりで定められたと伝えられる。(小島一男『会津三十三観音御詠歌』 昭和63年 歴史春秋社 p.13; 神谷昌志『遠州三十三所観音巡り』郷土出版社 平成5年 p.17)
- 8) 新西国三十三カ所(京都・奈良・兵庫・滋賀・大阪の各府県にわたる)や九州三十三カ所観音霊場(熊本・福岡・大分の各県にわたる)などがある。
- 9) これは「本四国」の各札所の砂を袋に入れて、堂舎の回りに並べ、それを踏むことによって本四国を巡ったのと同じ効果を出そうとした「お砂踏み」や、さらには現代の高校野球の選手たちが甲子園球場の砂を袋に入れてもち帰るのも、聖地の土に聖性を認めるという同じ考えであろう。
- 10) 白木村教育委員会編『白木村誌』元大阪府南河内郡白木村教育委員会 昭和32年 pp.68-73
- 11) 参考のために「新西国」「新四国」についての最近10年間に発行された巡拝ガイドの代表的なものを次に挙げてみる。
 - ①越後四国八十八ヶ所霊場会『越後八十八ヶ所霊場めぐり』 平成4年
 - ②柿本憲二・関 保男『信濃三十三札所めぐり』郷土出版社・長野 平成3年
 - ③神谷昌志『遠州三十三所観音巡り』郷土出版社・静岡 平成5年
 - ④木塚治雄『観音霊場巡り-猿島・葛飾坂東観音御開帳記念』(ふるさと文庫)筑波書林・土浦 平成元年

- ⑤黒川 脩『駿河三十三所観音巡り』静岡郷土出版社・静岡 平成元年
- ⑥小島一男『会津三十三所観音御詠歌』歴史春秋社・会津若松 昭和53年〔再版 昭和63年〕
- ⑦山椒の会編『水戸三十三観音札所』筑波書林・土浦 平成6年
- ⑧山椒の会編『仙道三十三観音札所』筑波書林・土浦 平成6年
- ⑨信多純一・中造和夫『大阪三十三所観音めぐりー近松門左衛門とともに歩くー』大阪三十三所観音めぐりの復活を願う市民の会（池谷典彦）平成4年
- ⑩摂津国八十八所霊場会編『摂津国八十八所巡礼』朱鷺書房・大阪 昭和62年〔再版 平成5年〕
- ⑪相馬 大・水本義一『近江33カ所』カラーブックス 581 保育社 平成3年
- ⑫知多四国霊場会編集部『知多四国めぐり 各札所寺院縁起案内』半田中央印刷株式会社 昭和63年〔再版 平成3年〕
- ⑬知多四国霊場会編集部『知多四国めぐり地図帳』半田中央印刷 平成元年
- ⑭塚田芳雄『江戸・東京札所事典』下町タイムス社 平成元年
- ⑮つづき佳子作画・知多四国霊場会監修『まんが 知多四国はじめて物語』半田中央印刷 平成4年
- ⑯西田鼎江『八王子三十三観音霊場ーその案内と現況ー』揺籃社・八王子 平成5年
- ⑰原田昭男『佐久三十三番観音・札所めぐり』櫛・佐久 平成5年
- ⑱平幡良雄『尾張三十三カ所 観音霊場めぐり』満願寺教化部 昭和62年
- ⑲平幡良雄『津軽ー観音巡礼ー』満願寺教化部 平成4年
- ⑳山田計司『忍領西国三十三札所・足立坂東三十三札所・忍秩父三十四札所 観音巡礼』さきたま出版会 平成5年
- ㉑吉海町教育委員会編『愛媛大島 島四国同行二人』吉海町教委 昭和62年
- ㉒吉岡一男『仙台の三十三観音』宝文堂・仙台 平成3年
- ㉓渡辺克己『国東六郷満山霊場めぐりー宇佐神宮と三十三霊場巡拝の旅』双林社・大分 平成2年
- ㉔渡辺良夫『新四国弘法大師 埼玉八十八霊場巡り』さきたま出版会・浦和 昭和63年

12) 13)『篠栗町誌 歴史編』p. 238

14) 西氏によると、奥の院は篠栗霊場発足当初から存在していたという。

15) 九州歴史資料館編・発行『筑前粕屋若杉山の仏教遺跡』昭和61年 pp. 41-42 なお、これは文政6(1823)年の写本であり、原文に句読点はない。

16) 『ささぐり 暮らしの四季』pp. 64-66

17) 『ささぐり 暮らしの四季』p. 68

18) 合屋武城『若杉部落史』昭和32年 p. 53

19) 『若杉部落史』pp. 77-81

20) 西日本文化協会編『福岡県史 民俗資料編 ムラの生活(上)』福岡県 昭和59年 p. 1121

21) 『篠栗町誌 歴史編』p. 244

22) 「新四国霊場の発展過程ー福岡県篠栗霊場のばあいー」p. 626

- 23) 佐賀新四国については中尾 堯編『古寺巡礼辞典』東京堂出版 昭和48年 p.108、三重郷西国と井手郷西国については久多羅木儀一郎『大分縣下に於ける郷土西國』昭和7年 p.53を参照。
- 24) 史料的根拠は見いだしていないが、篠栗霊場側が、南蔵院を迎え入れた動機を説明する手段として伝えられたとも考えられる。
- 25) 『ささぐり くらしの四季』pp.69-70
- 26) 可見茂公編・福岡縣寺院沿革史刊行會 昭和5年 pp.391-392
- 27) 『角川日本地名大辞典 40 福岡県』昭和63年 p.614 [近代] 篠栗村の項。
- 28) 『篠栗町誌 歴史編』p.247
- 29) 南蔵院住職夫人からの、平成5年5月4日の聞き書き。夫人は4、5、9、10月という春秋に参詣者が最も多く、月間8-9万人、厳寒の2月、梅雨の6、7月、師走の12月が少なく月間3万人、また特に参詣者の多い日として、日曜祝日、盆の後の日曜日、毎月21日のお大師さんの日、28日のお不動さんの日を挙げておられる。
- 30) 田中 博『巡礼地の世界 四国八十八カ所と甲山八十八カ所の地誌』古今書院 昭和58年 pp.32-35
- 31) 『ささぐり くらしの四季』p.80
- 32) 平成5年5月5日 西 義助氏宅にて西氏からの聞き書き。
- 33) 本州三十三観音は、名古屋を中心として毎日名古屋に帰り、延べ7日間で巡拝するように行程が整えられるため名古屋往復の部分が不規則になり、奥州陸奥糠部郡三十三観音では、1→5、8→3→2→4→9、19→21、30→33→32→31→20の部分のみが不規則である。備中西国三十三所では、19→21、22→20→29、31→33→32→26、28→23、24→2の部分のみが不規則である。(中村精二『巡礼霊場の形態とその空間認識 日本の宗教空間』昭和48年度 東京芸術大学大学院修士論文 pp.171-176)
- 34) 下谷浅草三十三所は、『江戸歳時記付録』に記された所在町名による限り番号順の巡拝は不可能であり、田名部海辺三十三番は下北半島の海岸線に沿って置かれているが、順序立った並べ方ではなく、番号通りに巡拝するには同じ所を幾度となく行ったり来たりしなければならない。(『巡礼霊場の形態とその空間認識 日本の宗教空間』pp.177-178)
- 35) 『ささぐり くらしの四季』pp.73-74
- 36) 2つの順路に従って、篠栗がいかにか不規則な番号をもっているかの例として、最初の10カ所の順番を次に記す。
- (a) 篠栗駅からの順路 33・本明院→21・高田虚空蔵堂→37・高田阿弥陀堂→69・高田観音堂→32・高田十一面観音堂→4・金出大日堂→35・珠林寺薬師堂→86・金出観音堂→27・金出神峰寺→87・弘照院・・・
- (b) 城戸駅からの順路 1・南蔵院→45・城戸ノ滝不動堂→31・城戸文珠堂→71・城戸千手観音堂→60・神変寺→74・城戸薬師堂→72・田ノ浦拝師堂→7・田ノ浦阿弥陀堂→65・三角寺→83・千手院・・・